

『三四郎』二頭の迷羊

Junko Higasa 2014.8.7

絵本展を観に行き、美禰子が三四郎に送った葉書の二頭の羊の絵を思い浮かべたところへ、塩野七生著『日本人へ 危機からの脱出篇』の中の『羊の群れは、犬に導かれないと崖から落ちてしまう』という文が重なり、私の想像力は以下のように広がった。

「迷羊」とは、キリスト教における神と人間世界の話だが、これを人間と人間社会に置き換えたらどうだろう？国民は国家（元首・リーダー）に導かれないと迷ってしまう。これを逆説的に見ると、明治政府というリーダーの方針に乗れない国民は、社会の迷子ということになる。

広田先生と野々宮さんは、時流を受け止めながらも自分の本道からブレない。与次郎は時代に合わせて気焰を吐く。よし子は時勢に乗る準備がある。原口さんは時代の姿をあるがままに写し取る。しかし美禰子と三四郎は、時流に抵抗があるように見える。

美禰子は、「有能強靱男子育成のための賢母養成」「国内経済維持のための家督存続結婚」に対して「女性解放社会地位向上」「自由恋愛」を目指した。

三四郎は、地方自治から離れて、中央集権での発展を夢見たが、古来日本を置き去りにできず、根なし西洋化と戦う勇気も力もない。

社会の壁に立ち向かう美禰子と、退く三四郎は、真逆ながら、やがて犬に従って柵内に帰ることを憂いながら、草原での一時の自由を味わう羊のようだ。